

その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさりと投げ出して、一意に新しい方角へ走りださなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほど尊い過去があつたからです。彼はそのため今日まで生きてきたと言つてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向かつて猛進しないといつて、決してその愛の生ぬるいことを証拠立てるわけにはゆきません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏みとどまって自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうすると過去が指し示す道を今までどおり歩かなければならなくなるのです。そのうえ彼には現代人の持たない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。上野から帰つた晩は、私にとつて比較的安静な夜でした。私はKが部屋へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机のそばに座り込みました。そうしてとりとめもない世間話をわざと彼にしむけました。彼は迷惑そうでした。私の目には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声には確かに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手をかざした後、自分の部屋に帰りました。ほかのことにかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対して持つていたのです。私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で目を覚ましました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の部屋には宵のとおりまだ明かりがついているのです。急に世界の変化したのは、少しの間口をきくこともできずに、ぼうつとして、その光景を眺めていました。その時Kはもう寝たのかとききました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向かつて、何か用かときき返しました。Kはたいした用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行つたついでにきいてみただけだと答えました。Kはランプの灯を背中に受けているので、彼の顔色や目つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声はふだんよりもかえつて落ち着いていくくらいでした。Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の部屋はすぐもとの暗闇にかえりました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた目を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になつて、昨夕のことを考えてみると、なんだか不思議でした。私はことによると、全てが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kにききました。Kは確かに襖を開けて私の名を呼んだと言ひます。なぜそんなことをしたのかと尋ねると、別にはっきりした返事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡ができるのかとかえつて向こうから私に問うのです。私はなんだか変に感じました。その日はちょうど同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていつしようちを出ました。今朝から昨夕のことが気にかかつている私は、途中でまたKを追及しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかつたのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「その話はもうやめよう。」と言つたではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点にかけて鋭い自尊心を持った男なのです。ふとそこに氣のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想しました。すると今までまるで氣にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

Kの果斷に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔なわけも私にはちゃんと飲み込めていたのです。つまり私は一般を心得たうえで、例外の場合をしつかりつらまえたつもりで得意だつたのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭の中で何べんも咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失つて、しまいはぐらぐらうごき始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとつて例外でないのかもしれないと思ひだしたのです。全ての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸の中に畳み込んであるのではなからうかとうたぐり始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。その時の私がいこの驚きをもつて、もういつべん彼の口にした覚悟の内容を公平に見回したらば、まだよかつたかもしれないと驚きました。私はまだKがお嬢さんに對して進んでゆくという意味にその言葉を解釈しました。果斷に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうといぢずに思ひ込んでしまつたのです。

私は私にも最後の決斷が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇氣を振り起こしました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を決めました。私は黙つて機会を狙っていました。しかし二日たつても三日たつても、私はそれをつらまえることができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待つて、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといつたふうの日ばかり続いて、どうしても「今だ。」と思う好都合が出てきてくれなひのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はどうとう堪えきれなくなつて仮病をつかいました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで布団をかぶつて寝ていました。私はKもお嬢さんもいなくなつて、家の中がひっそり静まつた頃を見計らつて寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食べ物や枕もとへ運んでやるから、もつと寝ていたらよからうと忠告してもくれませんでした。体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗つていつものとおり茶の間で飯を食ひました。その時奥さんは長火鉢の向こう側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも昼飯とも片付かない茶碗を手持つたまま、どんなふうの問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは實際氣分がよくない病人らしく見えただろうと思ひます。

私は飯をしまつてたばこを吹かしました。私が立たないので奥さんも火鉢のそばを離れるわけにゆきません。下女を呼んで膳を下げさせたうゑ、鉄瓶に水をさしたり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合せています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問ひました。奥さんはいえと答えましたが、今度は向こうでなぜですときき返してきました。私は実は少し話したいことがあるのだと言ひました。奥さんはなんですかとつて、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の氣分に入り込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩りました。

私はしかたなしに言葉の上で、いいかげんにうろつき回つた末、Kが近頃何か言ひはしなかつたかと奥さんにきいてみました。奥さんは思

いもよらないというふうをして、「何を?」とまた反問してきました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか。」とかえって向こうできくのです。

Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気になかった私は、「いいえ。」と言ってしまった後で、すぐ自分のうそを快からず感じました。しかたがないから、べつだん何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言いました。奥さんは「そうですか。」と言って、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私にください。」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでもしばらく返事ができなかったものとみえて、黙って私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてはくれません。「ください、ぜひください。」と言いました。「私の妻としてぜひください。」と言いました。奥さんは年をとっているだけに、私よりもずっと落ち着いていました。「あげてもいいが、あんまり急じゃありませんか。」ときくのです。私が「急にもらいたいのだ。」とすぐ答えたら笑いました。そうして「よく考えたのですか。」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないというわけを強い言葉で説明しました。それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のようにきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合にはたいへん心持ちよく話のできる人でした。「よござんす、差し上げましょう。」と言いました。「差し上げるなんて威張った口のきける境遇ではありません。どうぞもらってください。ご存じのとおり父親のない憐れな子です。」と後では向こうから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付いてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とはかからなかったでしょう。奥さんはなんの条件も持ち出さなかったのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれでたくさんだと言いました。本人の意向さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私のほうが、かえって形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから。」と言いました。

1 次の語句の意味を調べよ。

(1) 果断

「
」

2 次の語句を用いて、同じような意味を表す四字熟語を完成させよ。

(1) 一意 〓 「
」

(2) 猛進 〓 「猪_一一_一」

3 「私」の失敗の原因の一つである、Kに対する誤解を、苦い後悔をもって振り返っていることがうかがえる言葉を、「その頃は」で始まる形式段落から抜き出せ。

4 「愛の目的物」〔一〇三・下5〕が指すものは何か。

「
」

5 この後のKの行動に対する伏線となっている一文を、「その時Kは」で始まる形式段落より抜き出し、初めの五字を示せ。

「
」

6 次の表現を分かりやすく言い換えよ。

(1) 言葉を、頭の中で何べんも咀嚼(する)

「
」

(2) 私の得意はだんだん色を失って、しまいはぐらぐらうごき始めるようになりました。

「
」

(3) 言葉の上で、いいかげんにうろつき回った

「
」

7 次の表現を分かりやすく言い換えよ。

(1) 本人が不承知のところ

「
」

(2) 今朝の話をお嬢さんにいつ通じてくれるつもりか

「
」